



日本住血吸虫中間宿主発見顛末記

編集・構成 山口 明

◆少年期の思い～医科大学への進学

慶之助は慶応元年(1865)5月15日、信濃国西寺尾村(現在の長野市松代町)に出生している。その頃、甲府盆地を中心に奇妙な風土病が流行しているのを聞き、早くも慶之助少年に原因を究明したい思いが芽生えたという。志がかなって帝国大学医科大学(現在の東京大学医学部)に進み、明治23年(1890)に卒業、第一高校の教授などを経て同35年(1902)にはドイツのフリードリッヒ・レフラー教授のもとに留学する。2年後に帰国すると京都帝国大学福岡医科大学(現在の九州大学医学部)の初代衛生学教授に迎えられた。就任して間もなく、筑後川沿岸にも甲府盆地でみられたような風土病が発生していることを知らされる。(文献①から)

◆基礎となった寄生原虫の研究

独逸留学も僅かで帰り、福岡で直ちに寄生原虫の研究を始められた。宮入先生自身の筆で今私の珍蔵している原稿によると、細菌の方はやる人も沢山あることだから、自分は寄生虫方面を選んだ旨書いて居られる。かくて先生の寄生虫追及が始められ、蛙・蛇・魚・貝・鳥・鼠・兎等々眼にふれる鳥獣は何一つ残さず、消化管から血液や筋肉に至る迄、あらゆるものが丹念に調査され、それ等を全部序列正しくまとめあげ、それに先哲の業績から、模範的なものを一式一式つづり合わせた。これがあの原虫研究の手ほどきを平易な然し独特な文体を以って書き綴られたものが「寄生原虫研究の葉」である。従って本書は種本を祖述した訳本まがいの本とは全くちがった本である。(文献⑨・⑩を編集構成)



▲初版は明治42年10月

私は教室入りするとすぐには、室扶私菌を材料にして、一時細菌学の事をやらされたが、其後は原虫のことをやらされた。トリコモナス、ラムブリア、ザルコチュスチス、トリパノゾーマ、口腔アメーバ、赤痢アメーバ等々、何でも原虫を追かけまわす仕事をやらされた。(文献⑨から)

原虫の次は、宮入先生は多細胞寄生虫に這入られ、第一に手がけられたものが日本住血吸虫であり、其中間宿主の探検であった。(文献⑩から)

私が紐育のロックフェラー研究所に居た時此本を机の上のせて置ったのを、野口先生が見つけてかせと言う。暫くしてかへしに来られたが、中々かへすと言はない。善い本だね君、善い本だねと言うきりで、あとは本をパラパラやる。研究所では禁断の日本語でそれをやる。そんなに気に入られたら、差し上げましょう、私は帰ればいくらでも買えるのですからと言うと、とても喜んで持って行かれた。これは寄生原虫というものを正確に学ぶ最もよい本だと私は思う。此本と、稲田先生から送ってくださった、ワイル氏病のスピロヘータとが、野口先生の原虫知識を少なからず刺激したに相違ないと私は思っている。(文献⑨から)

◆中間宿主は必ずある

エジプトのロース氏の住血吸虫幼虫体内の胚細胞団の研究やロエカアト、トーマス両氏の殆ど同時に(ロ氏1882年10月9日、ト氏同年同月19日)公表されたジストマの研究成果をもとに、住血吸虫の幼虫を見ると胚細胞団がなるほど見えてきました。この胚細胞団が見えるようになってからは、私共は最早住

血吸虫に中間宿主があるということには、一点の疑を懐かないようになりました。それで中間宿主の搜索に骨を折ろうと決心したのです。(文献④をもとに口語文に改変要約)

日本住血吸虫のミランジウムには胚子が認められる。胚子がある以上、これが中間宿主体内でスポロゴニーを営むにちがいない。さすがのロースもナイル河畔のあらゆる軟体動物を検べた揚句、とうとう兜をぬいでこの幼虫は終末宿主体内で変態するのだらうと逃げを打っているが、本邦でのその研究に徴しても、どうも中間宿主を必要とするらしい。いや、中間宿主は必ずあるにちがいない。土屋谷保などもそうした熱心な主張者なのである。

「どうだね、鈴木君」福岡医科大学衛生の宮入慶之助は右隣の机に席を占める鈴木稔に呼びかけた。

「この間、明石君にもいっておいたんだが、どうだろう。こいつを一つやってみようじゃないか」

「はい、面白いと思います」

「寄生虫学を専攻しようという君には打ってつけのテーマだよ」

「は、みっちりやってみます」(文献②から)

◆牛の糞採集

初夏ではあるが、筑紫平野は相当に暑かった。それにこの1913年(大正2)は近年にない旱魃でもあった。どんな苦難にもめげそうもない健婦は終日車を踏んで田へ水を汲み上げ、幾十年の困苦を顔に刻み込んだ老農はあれこれと勾配を見はからって畑を湿おす算段をした。

またしても例の二人連れである。年輩なのはフェールも用いたであろうような鍔広のソフトを頭に戴いてピンセットを手にし、年若なのは掴み潰した中折帽で掬い網を肩にしている。もうかなり長いことあちこちと例の溝濼えを済ませたらしい。

鳥栖駅を降りたのは暁風に一味の涼気を感じるころだったが、とある流れの河原で、朝に仕入れた駅弁をつかってからも、もうさんざん歩き廻った。靴は埃で真白である。

「・・・自然はこれでもかこれでもかとわれわれに見せつける。こうかと問えばそうだと答える。ああかと尋ねればそうではないという。またこうかと問えばそうだと答える。何遍やってみても同じだ。自然は正直だ」馬力と擦れちがうので途切れた教授の言葉はつづく。「ところが日本人はいくら見せつけられても、振りむきもしない。これがレフレル先生だと、こうやって前に鳥が落ちていたとする。細かいことはとにかくにして一応調べて見る。切角の実験を無益にするという法はない・・・」話はつづく。いつ果てるとも見えない。車内ででも何処でもなにか読んでおられるかなにか喋っておられるかだと。花柳病科で当時博多で流行児の関口太毛が評した教授の話は、実際尽くるところがない。「そこがちがうんだ、レフレル先生といえば細菌の鞭毛を染め出した仁だ。だが案外不器用でね。手さばきからいったらわれわれの方が数等優れている位なんだ。ただ自然を根気よく正しく観るということがちがうんだ。その精神がすっきりのみ込めたから、これでよしと上げようと思ってね、ところが先生、なかなか許してくれないんでね・・・喋っているうちに大分きたね、君、あれ、なんだか知っているかね」

見ると農家の納屋の屋根べりに沿って小舟が腹をみせて横吊しになっている。

「あれって、舟ですか、先生」

「そうだ、舟だがね」

「さァ・・・」

「水の出たとき乗るんだよ」

「そういえばこの辺は水郷なんですね・・・一池還一沼不見一流川ってところなんですね」

「えらい文献を引っ張り出してきたね」

「広瀬淡窗です。あの淡々としたところが好きなんです」

「淡窗の詩は淡々としているが、あれでなかなか苦労するんですぜ」

「それからあの杜甫の繊細な筆致が堪らなくいいんです。李白は飲んでばかりいるようで・・・」

「杜甫もあれでなかなか飲んだくれなんですぜ・・・そこでどっちへ行くかね」

助手はポケットの地図を出した。

「この道を行くと筑後川へ出ます」

「そう、行ってみるか」

筑後川の堤防で、うっかりするとまた歴史のお講釈が始まるかも知れなかった。だがそうした雰囲気
の醸成されないうち眼の前の路上に自然からの贈り物があった。牛の糞である。すぐとシャーレに納め
られる。

「今日は大した獲物はなかったなあ、これで帰るとしようか」

筑後川の堤防で拾った糞、それにはかなり多数の住血吸虫卵が含まれていた。この卵がまた研究に
必要なのだ。この材料はある貧農の持っていた瘦牛から排泄されたものだったが、それからというもの
は、入要のときは何時でもこの堤防まで採りに行くことになった。 (文献②から)

◆記録する

先生は、まず濃厚な流行地域の再確認をしようと、文献に求めずに自分の足と手と眼とを働かせて、
確実に突き留めようとされました。まず径5、6cm位のペトリシャーレ30個ばかりを入れることのできる
簡単な手提げと、大型のピンセットとを持って流行地に出かけ、村落附近の小道路、畦道等を物色して、
苟も人畜の糞便は一切拾い取ってシャーレに収め、番号、場所、月日、推定動物名等を書いたエチケッ
トを貼付しました。一方拾った地点は地図の上に詳細に書き込まれました。 (文献⑥をもとに改変)

◆動物感染試験

私は昨年末(大正元年)よりこの病(日本住血吸虫症)の予防のことを思い立ち、一通り先進研究者
の報告に目を通し、さて何はともあれ、流行地の実際を知らなければならぬと思い、今年(大正2年)
初めより、暇さえあれば本郡(佐賀県三養基郡)並びに福岡県三井郡の中を西は古川沼川のあたりから、
東は大刀洗川に至る間の村落を見回りました。そうしたところで人畜の糞便を見当たり次第に採集し、
この糞便の検査によって種々の有益を得たほか、本来の目的である住血吸虫病の蔓延の状況をほぼ窺い
知ることができました。こうしてある村の牛の糞を材料として、まず住血吸虫の卵子及びその卵子より
おどり出る幼虫の姿を見定めることができました。馬糞や牛糞の中には、いろいろ面白い虫卵がありま
すが、ことに牛糞中の卵子は、住血吸虫の研究にも大いに役に立ちました。

牛糞中の卵子について為すべきことはちょっと片付きましたので、先進研究者の為されたところに
従い、動物に感染試験を行って、有毒溝渠を突き留めようと思い、ここか、そこかと試みましたが、
その甲斐はありませんでした。人様を煩わしていけないと思っていましたが、酒井の古賀道俊君にお
願いをして、同村(佐賀県三養基郡基里村)の南方、田間の溝渠に動物を浸漬しました。

(文献④をもとに口語文に改変要約) (文中の括弧内は山口が付記したもの)

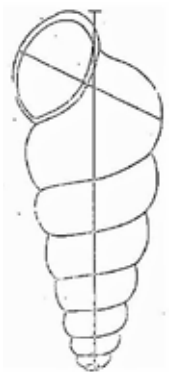
◆蝸牛～中間宿主の発見

佐賀県三養基郡基里村酒井の村内を歩き回り、路傍から拾った野糞を調べて、この村の
住民に日本住血吸虫病の者が多いことを知ることができました。

(文献③をもとに口語文に改変要約)

有毒溝渠を突きとめようと苦心をしていたところ、或る日田植中の農夫の人達に教えら
れて、全く「肥気」のないのに、必ずや「肥まけ」するということを知り、
知らないものはないという小溝を聞き、猫と兎をその溝に浸して待っていました。そして
溝水の中を掬うと小さな蝸牛を見つけました。この蝸牛が即ちその後の研究によって久し
く待ち望んでいた日本住血吸虫の正しき中間宿主だったのでした。

(蝸牛発見日は7月20日前ですが、何日かは不明) (文献④をもとに口語文に改変要約) ▲文献③挿図より



◆蝸牛の観察

介殻は右捲で色は黄褐色、介殻の質は滑らかで平ら、押しつぶし易く、回旋はゆるやかに均等に大きくなり、その数7、高さは7mm余り、幅3mmほど、大きいものでは8または9mmになるものがある。幼若のものは回旋4または5、高さ僅かに2mmに過ぎないものもあります。小蓋は角質で左捲です。体には口、咽喉、胃腸、肛門、肝臓を有し、またそれぞれ感覚機関、神経機関、生殖機関を有します。雌雄異体です。素人眼には一種のラルテチアのように見えますが、これを専門家に聞いて正しい所属を定めなくてはなりません。この蝸牛をシャーレの水中においてキャベツを与えて日々その水を新たにして、長期間養うこととします。(文献③・⑥をもとに構成して口語文に改変要約)

(この蝸牛は広島県片山地方にも山梨県甲府附近にもあり、片山地方は大正元年7月27日、甲府の南、大鎌田、二川の両村には同8月13日に鈴木が採集)

初めこの蝸牛を採集して先ず目につくのが形が大きいもので色が黒いものです、回旋の一及び二は既に磨れて消えているのを通常とします。これは即ち成長したもので、多くは皆多数のツェルカリアを宿しています。幼若のものは色が淡黄色でほとんど全くツェルカリアまたはその前代と見られるものを宿していません。全てに弱拡大で見る限り組織内の寄生生物を有していません。それで幼若のものだけを選んで感染試験の用に供し、成長したものだけを悉く別に養うこととしました。

(文献③をもとに口語文に改変要約)

住血吸虫は蝸牛に宿っている時でも人体に住している時のように蝸牛の肝臓に住しており、蝸牛の肝臓を横断して見ると丁度麦わらを束にして横断したような状態で沢山います。また500倍以上の顕微鏡で見ると病虫の内臓まではっきりと見ることができます。(文献⑤をもとに改変)

◆蝸牛への感染実験

この蝸牛と住血吸虫の幼虫とを、浅い小さなシャーレの中に一緒に入れて、ルーペを見ていますと、以前に書物で読んだロェカアト氏がジストマの幼虫をその中間宿主に遭遇せしめた時の光景がほとんどそのまま見られますので、真に愉快でたまりません。

私共のやりました方法は、住血吸虫卵を有する牛糞を凡そ馬糞の塊一つまたはその半分ほどを高くして底の尖った硝子器の中に入れて、棒で掻き混ぜながら水を加えて一杯とし、数分間そのままおき、上水が澄んだ時にこれをサイフォンにて流し去り、また水を加えて一杯となし、数分間おいてその上水をサイフォンにて流し去り、四五遍すると終に上水は僅かに黄色を帯びる程度になります。そこまで洗いあげたら、またその上水の大部分を捨てて、洗われたる糞を大きなシャーレに移し、1時間半ばかり待っています。そうすると昨今の気温ならば大部分の卵からこの時間において幼虫が抜け出て、盛んに水の中を遊ぎまわります。そこでその上水を細い硝子管をサイフォンとして小さいシャーレに移し、直ぐにその中へ蝸牛を入れ、十倍程度のルーペで見て居ると、幼虫が蝸牛体に迫る有様が見



▲顕微鏡前の慶之助

られます。微細なことは、そういう風にしてしばらくおいた蝸牛をオブジェクトガラスの上ののせ、軽く押しつぶしてその上にデッキガラスを伏せて水をタププリと加えて、顕微鏡の強弱拡大を用いて観なければなりません。

さて蝸牛の体内に侵入した幼虫は、その好む所を選んで着き日一日と大きくなっていきます。私共がいよいよその發育の模様を追従しようと多数の蝸牛に感染させたのは7月20日でした。

久しく探して見つからなかった住血吸虫の中間宿主が今や初めて見つかったのであると、大いに喜びたいのですが、發育の結末まで見届けないうちは、本当の中間宿主であるか否かわかりません、わかりませんがもとにかくこの虫は中間宿主を求める性質のものであるということだけは定まりました。(文献④をもとに口語文に改変要約)

◆日本住血吸虫の發育

殻外にでたミラチヂウムの運動は、初め12時間において最も活発に動き、これを過ぎると次第に衰

え、10時間の後になると彼等はたとえその熱望した中間宿主に出会うといってもその力は既に宿主の外皮を穿つことはできないようです。

殻外に飛び出したミラチヂウムは水の中を泳いで、この蝸牛の傍らにいくと、その動きはとっさに変化し、突然刺蠅が牛馬を追うように、離れては寄り、左右前後に動き、必ずその目指す所に到達するまで動きは止りません。一たび蝸牛の皮面（触角、頭、足、外套膜縁）に定着するときは、口吻を延ばしてこれを押しつけ体を長く棒状にして全身の力を使って取り組む様は、実に我が生の存亡がこの一挙にかかっているとでも想見させます。やがて僅かに宿主体の上皮細胞間にその口吻を穿入すると身長を縮めて身幅を拡げて、また棒状に延びて圧して押しこんで、また再び身長を縮めて身幅を拡げます。その努力の甲斐があってその体が半ばまで入り込むと後の穿入は多くの時間を要しません。努力は必ずしも甲斐あるわけではなく、先ず蝸牛の顫毛細胞にはねのけられて近づくこともできない場合もあります。或いは一旦定着したところを離れて他の所を求めて去ることもあります。

宿主に入っては、体肉案外に柔軟なようで、或いは甚だしく延び、或いは体を折り曲げて何れも方向へも進みます。顫毛を動かしながら、ズルリズルリと滑り、多くは鰓及び消化管壁に至って留まります。唾液腺または神経節の附近などがその好む所です。

7月20日に感染させた蝸牛にそれから12日目に第一の独立レジアが見られ、スポロチュステの発育には早いものもあれば遅いものもあります。レジアは次第に肝管中に集って延びて、尋常でない長さに達し、その口は恐ろしげに開き、頭部の皮膚には多数の細刺を有し、体内には多数の二代目のレジアをはらんでいます。その体細くて甚だ長い体にはらまれたレジアの並んだ様は、さながらラブヂーチスなどの体内の卵のようです。これにおいて明らかにこのレジアは自然感染の場合における甲種のツェルカリアを産するものであることがわかりました。

(文献③をもとに口語文に改変要約)

成熟してレジアから出たツェルカリアは、大きな口吸盤と、小さな腹吸盤とを有し、全身に細刺を持っています。その橈尾は先端約三分の一のところ、分れて二条となっています。力を込めて突き張るときは、丁字形となり、毒腺三対、焰状細胞が五対あり吸盤を使って進み、橈尾を振って跳ねます。その蝸牛組織のなかを突き進む様を観ると、ほぼ哺乳運動の皮膚に穿入する様子を想像することができます。



▲ツェルカリア

(文献⑧をもとに口語文に改変要約) (文献⑦挿図より)

感染させた蝸牛の体内において二代目のレジアより生ずるツェルカリアの哺乳動物体に入ることができるまでに熟するには、尚2週日余りを要するものか。

(文献③をもとに口語文に改変要約)

◆偶然の出来事～鼠への感染確認

そこで一日一日とその発育の模様を見ていき、だんだん大きくなるのを知り、8月に入って、独立レジアが生じたのを見て、喜びはしながら、それでもいつ何時オーヤ、オーヤ、ヤッパリかという嘆声を発せねばならないかもしれないと思って、希望と不安との中で日が経過して、8月も半ばに近づいてまだなかなかどうなることか見えませんでした。しかし、偶然のことから安心して良いことになりました。

その偶然の出来事というのは次の事です。蝸牛の中に色が黒く形が割合に大きなものがあります。初めこの蝸牛を拾って帰って検査をして見るとこのような大きな蝸牛はほとんど皆ツェルカリアを宿しています。これに反して形の小さい色の黄色いものは、これを宿していません。それでこれを選び分けて、小さいものだけを感染試験に使い、大きな色の黒いものは皆一つの大きなシャーレに集めておきました。ふと思いついて、このツェルカリアの中にもしや住血吸虫の幼形はないかと、試しにこの中へ二十日鼠をつけてみたらどうかと、ほんの出来心で3時間ばかり鼠をその中に入れて出し、その翌日もまた翌日も都合4日間、3時間づつ同じ事を繰り返しました。そうすると8月11日の朝見ると、外の器に入れておいた白鼠が抜け出して、あちらこちらの蓋のしてなかった二十日鼠の器の中へ入り込み、3頭まで喰い殺していました。そうしてその3頭の中には例の4日間3時間づつ大きな蝸牛の入れてあったシャーレに浸けられていた鼠もあったのです。まあとにかくと、検査をしてみると、その鼠の肝臓の中には多数の住血吸虫を宿しておりました。中には最早雌を擁きたる雄もありました。この時こそ本当にうれしく感

じました。それでシャーレ内の感染試験は、その後何回も繰り返してみても成功することを確かめました。この事実によりこの蝸牛の体内に日本住血吸虫の幼形がいることが明らかになりました。

既にこの蝸牛の体内において、日本住血吸虫が哺乳動物の体に侵入し得るまでに発育するものならば我が手で感染させた蝸牛にあっても時間はいつまでかかるかわからないが、とにかく発育を遂げることには間違いのない、即ちこの蝸牛が正しき中間宿主であるということも確定するわけです。とはいえ、自然感染のツェルカリアには今まで見ただけでも3種類(甲乙丙)あり、どれが日本住血吸虫の姿なのかは、まだわかりません、わかりませんけれど今度はもう落ち着いて待つて居られます。

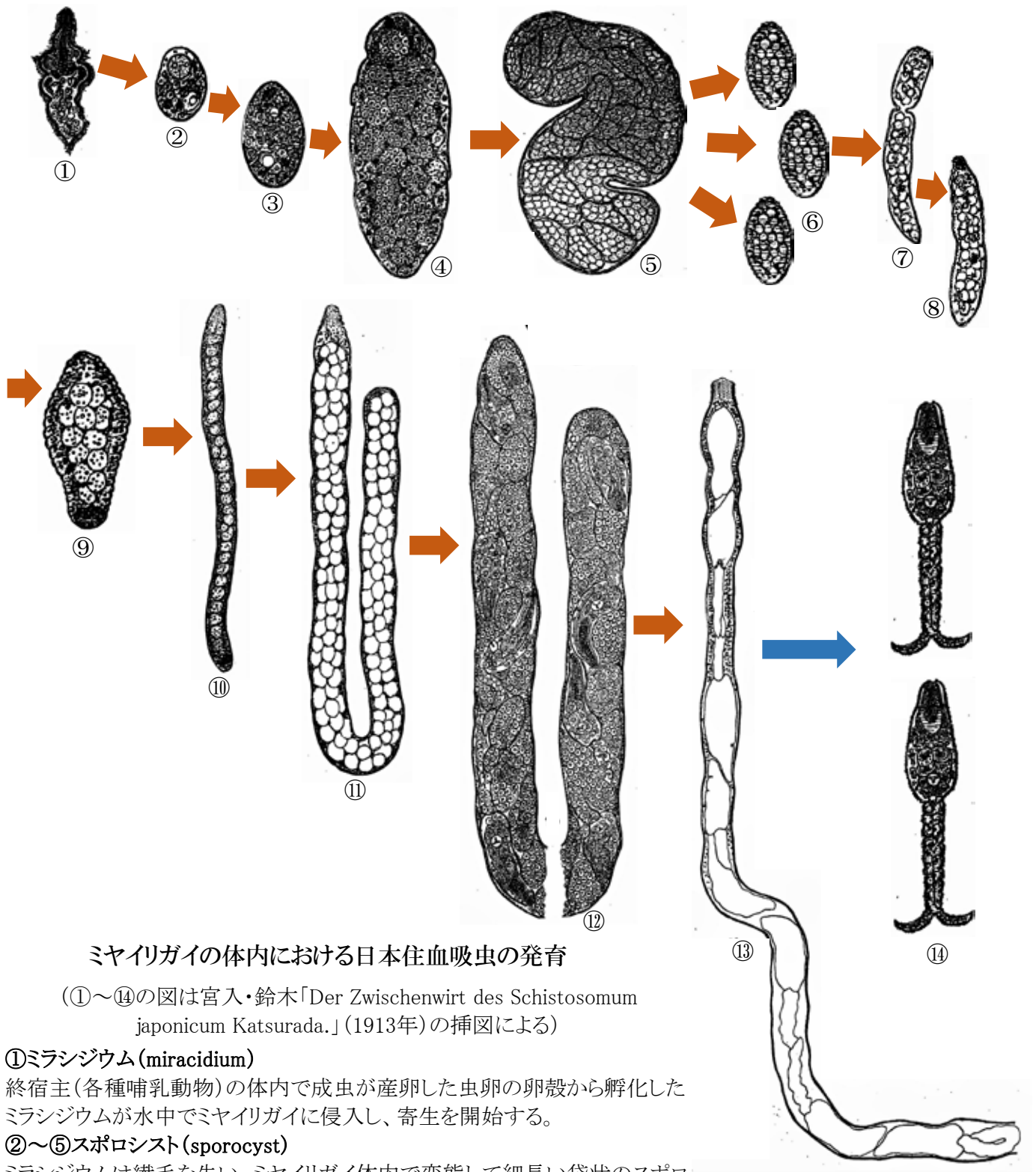
落ち着きはしましたが、それでも1週間が過ぎ、10日となり、蝸牛の体内の虫の発育がいかにも遅いように思われました。それでほかの手段によって8月22日に至りて立証の連鎖を遂げることができました。固より我が手に感染せしめたる蝸牛の体内に成熟したツェルカリアを以て哺乳動物に感染試験を行い、そうして陽性の成績を挙げ得ることができたという本道に達したのではありません。しかしながら、それと同価値の事実を確認することができたのです。その事実というのは一つには自然に感染した蝸牛の多数を検査して、私共の所謂甲種のツェルカリアのみを宿したるものを二つ三つ押しつぶし、これを例の大きなシャーレの水の中に入れ、そうしてその中へ二十日鼠をつけて、この鼠が確かに感染したことを、別々に試験した4頭の鼠において証明したこと、及び乙種(私共の材料ではこの種が最も多く自然に感染していた、丙種は極めて少ない、乙丙両種ともに口に太い1本の穿刺があり、撓尾は1本である)のツェルカリアだけを宿した蝸牛を10個20個押しつぶして大きなシャーレの水の中に入れその中へ浸けた二十日鼠は何れも健全であることを証明したこと、二つには自然にその甲種のツェルカリアを宿した蝸牛を多く調べてみると、その中には発育の進んだものがあり、また遅れたものもあり、色々な段階を逆に追うことができます。そうしてその最も若きものの有様はピッタリと我が手で感染させたものの発育が32日目まで進んでいたものがあります。その後今日に至るまでの発育はだんだん進みつつあります。ただレヂアから2代目のレヂアが産まれて、この2代目のレヂアがツェルカリアを生じるということは間違いのようです(文献③で報告したこと)。やはり初代のレヂアの体内にツェルカリアができるらしい、この点は尚研究を重ねた上に訂正をいたしましょう。(文献④をもとに口語文に改変要約)

◆予防対策

この虫の発育圏が明らかになったことで直接の効果と言え、差し当たり有毒溝渠を突き止めることが容易になっただけです。今や単にその溝渠にこの蝸牛が居るか居ないかを探せばいいのです。予防の問題には、まだなかなか本当に役に立つような案が立てられません。今までの私共の研究は主に実験室内のことであって、実際問題となると、この虫の哺乳動物体の外における発育の新知識を以て流行地の実際を踏査しなければなりません。この病の予防は少なくとも個人の力、一村の力ではなく一郡一県の力が働くのではなくては効果を上げることはできません。(文献④をもとに口語文に改変要約)

《引用文献》

- ①鈴木昶『日本医家列伝』2013年 大修館書店
- ②西尾恒敬『近代医学の歩み』1963年 大学出版社
- ③宮入慶之助・鈴木稔「日本住血吸虫の発育に関する追加」1913年8月 東京医事新誌第1836号
- ④宮入慶之助「日本住血吸虫の中間宿主附同虫病の予防」1913年9月 東京医事新誌第1839号
- ⑤「地方病中間宿主発見顛末(1)」山梨日日新聞 1913年10月10日付
- ⑥大平得三「吾等の業績(24) 宮入慶之助先生 日本住血吸虫の中間宿主の発見」1949年 日本医事新報第1328号
- ⑦宮入慶之助「日本住血吸虫のツェルカリア」1914年2月 医事新聞第895号
- ⑧宮入慶之助「日本住血吸虫病調査報告」1913年12月 官報第404号
- ⑨大平得三「思い出」1956年 寄生虫学雑誌5(2)
- ⑩大平得三「研究秘話 宮入貝発見の頃」1961年 九大医報31(1)
- ⑪大平得三「宮入さんと野口さん」1948年 東京医事新誌第3198号



ミヤイリガイの体内における日本住血吸虫の发育

(①～⑭の図は宮入・鈴木「Der Zwischenwirt des Schistosomum japonicum Katsurada.」(1913年)の挿図による)

①ミラシジウム (miracidium)

終宿主(各種哺乳動物)の体内で成虫が産卵した虫卵の卵殻から孵化したミラシジウムが水中でミヤイリガイに侵入し、寄生を開始する。

②～⑤スプロシスト (sporocyst)

ミラシジウムは繊毛を失い、ミヤイリガイ体内で変態して細長い袋状のスプロシスト(幼生スプロシスト→母スプロシスト)になり、体内の胚細胞群が発育して娘(ろう)スプロシストを形成する。

⑥～⑬娘スプロシスト (daughter sporocyst)

娘スプロシストが発育して母スプロシストから脱出する。娘スプロシストの胚細胞が成熟して内部にたくさんのセルカリア幼生ができる。

⑭セルカリア (cercaria)

発育したセルカリアが娘スプロシストを出て、さらにミヤイリガイを離れて水中に遊出し、終宿主の皮膚から侵入する。

①ミラシジウムがミヤイリガイに侵入してから約12週から20週目で⑭セルカリアとなる。

※宮入は⑥～⑬の发育段階を大正2年～3年の報文ではレヂア (redie)と説明している。

図書紹介

橘田活子叙事詩集『茶碗の欠片 杉山なかと地方病（日本住血吸虫病）』

2019年4月発行 260ページ 百年書房

本書の中表紙の次を開くと、2017年（平成29年）6月21日付の読売新聞山梨版が掲載されています。それは、山梨県が日本住血吸虫病の流行終息宣言を行った1996年（平成8年）から20年が経過した2016年にかつての流行地の中学生と成人にアンケートを行った結果を記した「若者『地方病』を知らない」という記事です。これによると地方病の原因となる病原体について「日本住血吸虫」と正しく答えた中学生は、1960年代は83.9%でしたが、2017年には0.26%で、地方病の病原体を人につす生物（中間宿主）を「宮入貝」と正しく答えた生徒は1960年は92.9%、2017年では2.15%にとどまったとあります。橘田氏がこの新聞記事を冒頭に掲載した意図は、日本住血吸虫病終息宣言からただか20年しか経過していないのに、かつて百年戦争と言われた地方病との苦闘のことが若い人からすでに忘れ去られようとしている現実には衝撃を受け、風化しつつあることに危機感を覚えたからではないかと思われます。それがまた本書がまとめられた動機にもなっていると考えられます。



「第二章 茶碗の欠片」に「この甲府盆地一帯では／奇病／この病気に罹り働けなくなった人を／茶碗の欠片と呼んだ／欠けた茶碗は使えないところから／役に立たなくなった人を指す／尊い命を授かりもつ人間も／欠けた茶碗と／一緒にされなければならない／百姓を担う者の宿命とされる／恐怖と怨念の深さ／どんなものであったろう」と、『茶碗の欠片』をタイトルにした思いが象徴的に詩で表現されています。著者の橘田氏は、宮入慶之助記念館が1999年（平成11年）に開館した間もないころに来館されたようで、日本住血吸虫中間宿主の発見者であった宮入慶之助の功績を胸に深く刻み込んだようです。

前館長宮入源太郎氏の配意で当館の記念館だよりをお送りしていたようで、記念館だより第13号（2010年9月発行）に橘田氏からのお礼の手紙が掲載されています。そこには「私、ひゃんなどころから杉山なかに大変関心をもちまして少しばかり調べていくうちに地方病の恐ろしさを知りました。長い歳月を苦しんで亡くなっていった人々、そして又、地方病（日本住血吸虫病）に真剣に取り組んでられました多くの人々の尊い姿。その中で、死の貝ともいわれましたミヤイリ貝を発見されました宮入先生の業績は山梨でも多大な評価をもって今でも語りつがれております。この病気は今でも東南アジアなどには存在しているという話も聞いております。風化させてはならない問題と考えている者の一人です。私もこの問題を取材いたしまして問題の深さにたちすくみ中途半端のまま一つの課題として自分の中に残して現在に至っております。いつかはまとめてみたいと思っております。」と書かれています。

この本が刊行されたのが2019年ですから、著者は10年以上の歳月を要して、地方病との闘いの痕跡を自らの眼と足で踏査し、詩人として詩想にまとめあげたのが本書です。先の手紙にもある山梨県で初めて医学研究用に自身の献体を申し出た「杉山なか」については、「第一章 杉山なか誕生」、「第三章 農婦杉山なか 死体解剖願い」と2章を割き、その勇気と百姓の矜持を詩で表現し、「杉山なか女」の名を本書の副題にも取り込んでいます。また、本書の帯紙には昭和町風土伝承館杉浦醫院中野良男館長が「日本住血吸虫病」の壮大な叙事詩であると賛辞を送っています。

編集後記

宮入慶之助は、日本住血吸虫の中間宿主ミヤイリガイを発見しましたが、そのいきさつについてはこれまで詳細に語られてこなかったのではないかと思います。それで今回、宮入の発見報告や残されている関係文献を引用する形で項目を構成し、顛末記としてまとめました。中間宿主貝はミヤイリガイと呼ばれていますが、宿主発見段階では、蝸牛としています。

宮入慶之助記念館だより 第31号

発行者 特定非営利活動法人

宮入慶之助記念館

編集者 山口 明

〒388-8018 長野市篠ノ井西寺尾2322

Tel&Fax 026 (293) 4028

HP：《宮入慶之助記念館》で検索

発行日 2021年（令和3年）6月20日